

# 黒漆大刀

鞍馬寺蔵

鞍馬寺に伝存する寺宝のなかに、坂上田村麻呂(七五八―八一二)佩用と伝えられている黒漆大刀がある。これは、すでに明治四十四年四月国宝(現在は重要文化財)に指定されているが、幸い近年当館に寄託を受け、詳しく調査する機会をえたので、その刀身と黒漆の拵について所見を述べてみたい。

この大刀の刀身は、切刃造りの直刀で、刃長は七六・六センチメートル、元幅は二・六センチメートル、先幅は一・八センチメートルあって、この種の遺品中では長寸なものである。とくに大きな見どころは、切刃の幅が広く、そこへ直刃に匂口の締った刃文を焼いていることと、完全に原形に近い姿を保っていることも挙げられる。日本古代の刀身は、ほとんど反りがなく、真直ぐにつくられているので、これを一般に直刀と呼んでいる。現存する直刀は、古墳から出土するものが多く、伝世品としては飛鳥時代の作と伝えられている四天王寺所蔵の丙子椒林剣と七星剣が古く、奈良時代のものでは正倉院宝物に五十五口が現存し、ついで平安前期の作として本題に取上げた鞍馬寺の直刀と鹿島神宮の節霊剣とも呼ばれている直刀などがある。これらの直刀について構造と作風をみると、形式に

は「平造り」と「切刃造り」とがある。このいずれが古式かについては刀剣学界の現時点では刀剣の基本的なものは、平造りの直刀であるとするのが説となっている。したがって製作としては平造りの方が古く、しだいに時代が下るにつれて切刃造りの直刀が出現したと考えられるが、この限界は古墳時代の中期頃と推定される。鍛錬も折返しの手法で行われて、後世の「まくり鍛」式に棟部で合せたものであることがわかる。作風も現存する研磨した刀剣類によって考察すると、鍛肌は板目が流れて、総体に白気と肌立っているものが多い。これは鍛錬技術の未熟さによるものであり、同時に地鉄の精選の不完全から生じたものと考えられる。焼刃は古墳出土のものには地と刃とがぼんやりして、その境がはっきり見られないものもあるが、飛鳥時代以降の作刀には、後世のように土取りで、焼入れを行ったものと考えられ、地・刃ともに明るく冴えたものが多い。刃文も直刃を主調とするが、まれには乱刃も見受けられる。この鞍馬寺の直刀にもそうした土取りで焼入れた直刃の刃文が、はっきりとあらわれている。

直刀に関する奈良時代の史料をみると、例えば『東大寺献物帳』には、

銅漆作大刀一口 刃長二尺六寸二分、有雙溝、鋒者偏刃赤檀把、洗皮懸、洗皮帶執、黒紫綾帶

黒作大刀一口 刃長二尺七寸、鋒者偏刃、牟久木把、但眼及目約并把並用銅以金漆之

横刀一口 刃長一尺四寸七分、又以鉄約其上以金鍍鉄上、紫檀把似犀角裏裏頭、

とあり、「大刀」と「横刀」の両方の字を用語として用いている。大刀は横刀とも書き「断ち切る」の意で、いずれも両者の訓は「タチ」であるが、これはすべて拵を帯で腰に下げて佩き、腰に横たえるところから「横」の字が当てられたものと考えられる。古墳出土

の環頭大刀・圭頭大刀・頭椎大刀なども、これらと同様に横刀用式のものであったと思われる。

直刀から反りのある湾刀へと移行する時期については、現時点では諸説もあって明確に断言しがたい。しかし現存する切刃造りの直刀と鑄造りの湾刀との形態・作風などを比較して考察すると、その限界は平安時代中期ごろからと推定される。

鞍馬寺の切刃造りの大刀は、切刃の幅が広くなって、後にみられる湾刀の鑄へと接近していることが注目される。このことは鑄造りの湾刀へ一歩前進を暗示するもので、時代的には過渡期のものとして考えてよからう。

拵は全長九四・〇センチメートル、把木を麻布で包み黒漆を塗り、鞘も同じく黒漆を塗るが、その下地は薄い革でつつんであるので、その収縮のためにいまも表面の漆には大きな断文が所々にあらわれている。把・鞘ともに損傷がひどいので檜材のような木部が露出している箇所も多い。また把との漆の光沢が異なっているのは、いまのべたごとく下地が布と革の相違があるからかもしれないが、或いはいずれかがやや時代が下るのではないかとも思われる。

金具のうち鐔は小形の鉄製で、楕円形をなし、そこに海鼠の様な形を大きく透してある。この形式は正倉院宝物の黒作大刀に多く用いられているが、縁と鞘口の金物とは欠失している。鞘には双脚の足用いているが、縁と鞘口の金物とは欠失している。鞘には双脚の足に小さな帯執をつけるために山形金物を付けてある。その表には嵌玉があったが、いまは二つとも脱落している。山形金具の裏側には遊動する鑲をつけて、足緒をここに接続したが、これも第二の足金

物だけに残存する。その他の金具としては、鞘の責金物や石突には特色がみられないが、鞘尾よりの十センチメートルほどは筒金物で鞘を保護している。これは佩帯した時に、この部分が他のものと接触して損傷しやすい個所なので、とくに取り付けたものと思われる。正倉院の大刀にもこの手のものが見られるので、やはりこの時代の特徴なのではなからうか。このような細部の構造などからみると、この鞍馬寺の大刀は、やはり正倉院に伝来する奈良時代の金銅細荘大刀の遺制を明らかに伝承しているようである。また鞘尾の石突金物も正倉院のそれよりは上下の喰足がやや長い、しかし春日大社の金地螺鈿毛抜形大刀ほどには長くなく、むしろ正倉院のものにちかい。

要するに、この鞍馬寺の黒漆大刀の拵の形式は正倉院伝来の金銅細荘大刀の遺制を強く示したものでありよく近似しているが、意匠や技法にはやはり時代的な相違は認められる。例えば上述した楕円四花形に大きな海鼠透しを施した鐔のごときは非常に正倉院の鐔とは相似しているけれども、細部においてはやはり平安前期の様式に属するものであると思われる。たとえば京都大学保管の黄金荘大刀（京都・山科西野山出土）の鐔と形が鞍馬寺のものと大変に似通っていることなども同様である。また鞍馬寺の大刀の帯執の足鑲が山形の佩裏に設けられているのは、櫓金式となっている春日大社の紫檀螺鈿劍刺よりもやはり古式であることがその細部においてうかがえる。したがってこの鞍馬寺の黒漆大刀が形式の上からみて平安中期のものより、むしろ奈良時代のものに近く、平安前期を下がらないものと推定されるし、寺伝の坂上田村麻呂佩用も時代的にそれと符合する。

（稲田和彦）